



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	青年期における対日イメージの発達的变化：中国の若者の自己認知と他者認知に注目して〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	文，慧超
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14415号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81785
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	WEN_HUICHAO_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：文 慧超

	主査 特任教授	長野 督
審査委員	副査 教授	寺田 龍男
	副査 准教授	加藤 弘通
	副査 教授	青山 和佳（東京大学大学院情報学環・学際情報学圏）
	副査 准教授	杉江 聡子（札幌国際大学観光学部国際観光学科）

学位論文題名

青年期における対日イメージの発達的变化

——中国の若者の自己認知と他者認知に注目して——

本論文は、中国の若者の自己認知と他者認知に注目し、発達心理学の枠組みを用いて、とくに青年期における対日イメージの発達的变化について混合研究法により分析したものである。

第1章は本研究の背景と課題を示す。中国人の持つ日本に対するイメージは、日中間の国交が正常化した後も、その時々々の政治情勢などに影響されて変化している。2013年以降ポジティブな傾向を示しているのは、観光客や留学生の増加や、若者たちの日本に関する情報の入手方法の変化なども原因として考えられる。これらの変化を背景に、中国の若者たちが日本についての多様な情報をどのように受け止め、どのような対日イメージをどのように形成するかという問題を提起した。

第2章は、先行研究を可能な限り俯瞰し、世論調査による全体の傾向の分析、対象者の地域、対象者の年齢による全体の傾向から、個人へと関連領域を絞りながら、課題の整理を行った。その結果、著者は大都市ではない地域、また日本語学習からの観点が扱っていない中学、高校生を含めた中国の若者に焦点を当て、理論的枠組みの構築に向けて、認知発達段階論を援用し、本研究の位置づけを示した。

次の第3章、第4章、第5章では、3つの研究目的、すなわち①「中国の若者の対日イメージの形成年齢層を知る」、②「中国の若者の持つ対日イメージの形成に影響を及ぼす情報源の利用の実態を知る」、③「中国の若者の対日イメージの形成過程を解明する」に関してそれぞれ研究課題を設定し、中国黒竜江省ハルビン市に居住する中学生・高校生・大学生を

対象に調査と分析、考察を行った。

第3章の【研究1】では、自由回答法によってアンケートを採り、頻出パターンマイニングによる量的処理を行って、対日イメージと対日情報源の実態、その両者の関連と学校段階別の相違を検証した。その結果、中学生の対日イメージの否定的傾向に対する学校教育の影響、また高校生においては対日イメージと対日情報源の多様化、さらに大学生では対日イメージと対日情報源の安定化していく様相を実証的に確認した。

第4章の【研究2】では、選択肢式アンケート調査を行い、対日イメージと対日情報源の相関関係を調べ、両者の対日イメージに影響を与える対日情報源の特徴を明らかにした。

第5章の【研究3】では、半構造化インタビュー調査を行って質的分析法で分析し、個人の認知の観点から、中学生、高校生、大学生の対日イメージの形成過程を明らかにした。

第6章では、3～5章で得られた知見を混合研究法により総合的に考察した。一般世論における対日イメージがその時々政治状況など社会的背景の中で動的に変化することは先行研究が指摘している。しかし個人の認識に焦点を当てた本研究では、青年期の成長過程における対日イメージは、社会的背景にかかわらず一定のパターンを描くことが明らかになった。また、「戦争・歴史認識」などのイメージは認知要素として常に存在し続けるものの、成長に伴ってそれに対する評価は単純な否定的評価から両義的な評価へと変化することも認められた。

本研究の学術貢献としては、第一に、従来の世論を扱った対日イメージ研究では社会的背景の変動に焦点が当てられてきたことに対して、本研究では個人の認識に焦点を当てたこと。第二に、従来、「青年期」「形式的操作期」と一括りにされてきた発達段階のなかに、実はもっと細かな変化があるということを、認知発達段階論の青年期に関する理論に照らし、対日イメージという視点から中学生・高校生・大学生を比較することで明らかにしたこと。第三に、量的研究と質的研究を組み合わせ、自身で収集した一次資料に基づき、青年期におけるイメージ形成のプロセスを分析し、そこから青年期に環境に合わせる＝適応する存在から、環境に働きかけ、変革する主体へと変化するプロセスの類型を抽出したことである。発達心理学においても高校生における発達の变化については十分な研究の蓄積がない中で、著者が発見した高校生におけるイメージの多様化の様相、様々な制限の中で多様な情報源に触れ、かつそれをもとに自分自身の考え方や生き方を作り出していく若者の姿を描き出した本研究の意義は発達心理学的にも大きい。

なお、本研究の独自性を認めつつも、特にメディア論・文化表象論の分野の先行研究の批判的検討が必ずしも十分ではないという指摘、また今回の研究で明らかになった発達過程の特徴はいわば各年代の平均値から得られた像であるが、特殊な事例として扱われた対象者を見ると、潜在能力から発達を捕らえることも可能ではないかという指摘は、著者の今後の課題として残された。

以上、これらの貢献により、本論文は北海道大学教育学院の博士請求論文として十分な内容を備えているという点で全員が一致した。